

若かった頃の思い出

—父や母が懸命に生きていた昭和の時代—



若かつた頃の思い出

—父や母が懸命に生きていた昭和の時代—

目次

はじめに	佐保 宗太郎	3
父（小野浩）の思い出		5
父（小野浩）の経歴		14
弔辞	S 信一郎	18
母（小野雪子）のこと		21
小さい頃の思い出	小野 雪子	29
若かった頃の思い出	緒方 るり子	33

若かった頃のこと	松下 順子	39
子供の頃の思い出	中野 あけみ	47
母から聞いたこと① (楽しかったことなど)		50
母から聞いたこと② (食べものの作り方など)		64
小野家の家系図		80
家系図 (戸籍) から見えてきたこと		87
古い写真で振り返る当時のこと		100
おわりに	佐保 宗太郎	108

はじめに

今から九年ほど前、母方の祖母（佐保輝）が亡くなった後、『小さかった頃の思い出』と題する本を作った。祖母の子供たち一人（母を含む）から寄せてもらった作文を中心に、祖母や祖父の生い立ちなどをまとめたものであった。

私の母は現在九二歳で、一月には満九三歳になる。祖母が亡くなったのは一〇三歳のときであり、母が同じ歳まで生きると仮定すれば、まだ一〇年あるが、これほどの高年齢になれば、いつ何が起きてもおかしくはない。前回は祖母が亡くなった後になって、「祖母たちが歩んできた人生のことを少しでも知りたい」と思って文集を作ることにしたのだが、今回は母が生きているうちに、父や母が経験したことなどを記録として残しておきたいと思うようになった。

ただ、私ひとりの力では、ほかの人が読んでみたいと思うような内容の本を作れる自信はなかったため、姉たちにも協力してもらって、本の構成についての意見をもらった。作文を寄せてもらったりした。これで、少なくとも姉たちの子や孫は、この本の読者になってくれるのではないかと期待している。（笑）

私たちがきょうだいが昔の思い出として単に懐かしむだけでなく、私たちの子供や孫たちが見て、「自分たちの先祖はそんな経験をしてきたのか」と少しでも理解を深めることができれば、この本を作った意味はあるだろうと思う。

佐保 宗太郎（本名…小野浩三）

父（小野浩）の思い出

父は口数の少ない人だった。筆者が子どもの頃、あまり父と話をした記憶がない。

父は公務員をしていたから、平日はほとんど会話をする時間がなかった。夕方、家に帰ってきて、明るいうちは植木の剪定をしたり庭掃除をしたりと動き回っていた。夜、お風呂に入った後は、ひとりで晩酌をしながらテレビを見たりしていた。

私も含めて子供たちに自分の方からいろいろ聞いたり話しかけたりということとはほとんどなかったと思う。学校での出来事や成績などについて父の方からあれこれ聞かれた記憶はない。授業参観などはいつも母が来ていたし、母にお任せのような感じだった。高校の入学式も母が来てくれたし、入学式の後の下宿探しも母がやってくれた。それは、ほかの家庭でも似たようなものだったのかもしれない。

父が私の将来の進路について口を挟んだり指図したりすることはまったくなかった。ただ、自分が高い教育を受けていないことに負い目を感じていたらしく、（自分より若い大学卒の職員が早く係長に昇任して自分の上にいることに対して不満を口にするの

を、私が少し大きくなった頃に聞いたことがある。)私を大学まで行かせることは早い段階から決めていたようだ。

私が高校生するとき、下宿を一年で変わることになったときは心配して、賄いの食堂と一緒に探してくれたりした。また、医学部を目指して浪人することにしたときも心配していたし、後に私が大学(工学部)を中退したときも心配して、なんとかならないものと赤峰敏朗さんと一緒に大学事務局まで出向いたりもした。子供のことに關して無関心ということではなく、必要最小限のことにしか口を挟まないという考えだったようにある。父にはいろいろ心配と迷惑をかけた。

父は土日が休みだったけれど、家の中でゆっくり過ごすことはほとんどなかった。夏の暑い時期は昼寝をしたり、寝転がって高校野球のテレビ中継を見たりすることもあったけれど、外で体を動かしていることの方が圧倒的に多かった。いつも家の外で何かの作業をしていた。

家では二反ほどの田んぼで米や麦を作っていたから、土日は田植えや稲刈り、草刈りなどの作業に追われることが多かった。また、ご飯を炊いたり風呂を沸かしたりするた

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。